

# 虹 かんじき職人は元社長

①63 1200年の伝統を継承



かんじきを作る荒井さん  
＝富山市内

かんじき職人は一年中忙しい。これからの晩秋は「切り旬」を迎える。材料となる木を採るのに、最も適した季節だ。木々は厳しい冬を前に葉を落とし、カビや虫の害を受けにくい状態になる。勝負は枯れ色になった山が、雪で真っ白に覆われるまで。材木集めは時間との闘いだ。

「立山かんじき」を作る荒井高志さん(65)＝富山市＝は軽トラックで山に向かい、朝から昼過ぎまで奔走する。探すのは、クロモジやアブラチャン。「南向きの斜面の木は軟らかくて弱いし、節もある。北向きの斜面の木は硬くて、力強いものが多い。でも難しい。一つとして同じ木はないし、完璧なものもない」と言う。

立山かんじきは1200年以上の伝統がある。1956年の第1次南極観測隊も使った。今も飾り物ではなく、実用品として冬山で活躍する。外国生まれのスノーシューや、手入れが楽なアルミ製のかんじきもあるが、木製ならではの強みがある。「熊撃ちや鹿撃ちの猟師は高さ2、3分の崖から飛び降りることもある。木のかんじきはその衝撃を吸収してくれるんですよ」と説明する。

山で採った木は数時間ゆでて軟らかくする。次にU字形に曲げて乾燥させ、だ円の形に組み合わせる。雪面に刺さる木製のツメと、足を固定する麻縄を付ければ、かんじきの完成だ。荒井さんはこの作業を1年を通じて行う。年間約500足を全国の愛好家に送り出す。ネットや登山用品店に加え、工房で直接販売もしている。「若い人が直接買いにくる。山の情報を直に聞きたいんだろうね。実際に会ったら、色々教えてあげたいものだよ」

荒井さん自身も山が好きだ。登山は経営者だった時に始めた。そして、自分で作った会社を譲って、かんじき職人になった。

◇

高校卒業後、旧大山町の商工会に勤めた。経済が右肩上がりの時代だった。会員企業の経営者と酒場や旅行に行けば、景気のいい話を聞いた。いつまでこんな時代が続くのかと思いつつ、派手な遊びを繰り広げる経営者たちをどこからやましく思った。

ある日、酒の席で「タイヤはいいぞ。富山は車社会だ。この先、車がどう進化してもタイヤはなくならんだろう」と親戚に言われた。妙に説得力を感じた。暮らしている旧大山町には、まだタイヤ販売店がな

った。挑戦する余地が残っていた。

1年ほどタイヤ関係の会社で修業して、30歳で地元に出店した。商工会時代に培った人脈もあってか、商売はあっという間に軌道に乗った。すぐに3店舗まで増やした。とはいえ、規模が大きな会社でもない。正月は従業員を休ませるために、自ら店に出た。雪道でパンクする車は多い。電話を受けては、現場に駆けつけた。

仕事に追われる生活の中で、数少ない楽しみが登山だった。付き合いのあった銀行の支店長に誘われて始めた。自然の中になると、せわしない日常を忘れられた。

◇

還暦を迎えた。店で扱うトラックのタイヤには、ホイールも合わせて100疋を超えるものがある。どんなに体力があっても、きつい作業が付きまとう。慢性的に腰を痛めていたし、ジャッキが倒れれば大けがを

ら、他人の顔をうかがう必要もない。

馴染みの登山用品店に相談した。店は佐伯さんの立山かんじきを扱っており、取り次いでもらう腹つもりだった。その社長に「やめておいた方がいい。手間だけかかって割に合う仕事じゃない。ボランティアみたいなものだ」と心配された。しかし、これまで必死に働いてきた。それなりに蓄えもある。「儲けようと思ってやるわけじゃない。やりたいからやる」と訴えた。

佐伯さんを紹介してもらったが、反応はもう一つだった。「かんじきだけでは生活していけない。簡単に飛びついてはいけない」と強く忠告された。佐伯さん自身もかんじき作りの専業ではなかった。父から継承した後は、運転手の仕事と兼業していた。よく考えるように促されたが、「なくなったら寂しいでしょう」と押し切った。

ひと冬かけてかんじき作りの手ほどきを



「虹」西淳子

する危険もある。体を心配する妻の勧めもあって、社長業を引退することにした。信頼できる知人に事業を譲った。

第二の人生をどう歩むべきか。家でじっとしているのは嫌だった。真っ先に頭に浮かんだのは山だ。まず山小屋に勤めようと考えた。しかし、30年も経営者をやっていた経験から、オーナーのやることに口を出してしまう気がした。いらぬ衝突を繰り返す光景が目につく。

朝刊を読んでいると、一つの記事が目にとまった。歴史ある立山かんじきの職人であった佐伯英之さん(80)が引退するという。記事によると、体力的に限界を迎え、後継者もいないらしい。かんじきはまさに大好きな山で使うもの。1人で作業するな

受けた。材料探しに山と一緒に行って驚いた。余暇の登山とは別世界だった。一般の登山はある程度整った山道を歩く。しかし、かんじきの材料となる木は深いやぶの中だ。道なき道を経て、ようやく手に入る。顔や足を枝に引っ掛けては、急斜面で転がり落ちることもあった。

製作作業も楽ではない。木を扱うには、力がある。重いタイヤを運んできたが、使う筋肉が違った。すぐに全身が痛くなり、接骨院に通うことになった。「えらいものに手を出してしまった」とぼやくこともあった。

佐伯さんはかんじき作りの基本だけ教えると、あれこれと言うことはなかった。「何から何まで頼っていたらあかん。分からん

ようになったら、まず自分で考えろ」と強調した。立山かんじきの伝統は守るべきだが、それぞれの時代で職人たちが小さな工夫を凝らして発展させてきた。考え抜いた変化の先にこそ、続いていく未来があるという思いだった。

荒井さんが慣れないなりに何とか形にしたものが、翌日になると生まれ変わったようにきれいに整えられていたこともある。佐伯さんは「材料を無駄にするわけにいかんだろう」とサラリと言った。

佐伯さんは荒井さんの作業ぶりを眺め、立山かんじきを託せると感じた。「俺だって怒るのは好きじゃないけど、登山者の命に関わる仕事だから厳しく言うこともあった。でも、荒井さんは素直に聞き入れる。着実にやろうとする。これなら大丈夫」。荒井さんに立山かんじきの職人の座と共に、自分が使っていた仕事道具も贈った。工房となる建物も荒井さんの自宅敷地内に2人で建てた。「教えた以上は、ちゃんと成功してほしいからね」と背中を押した。

◇

荒井さんは職人になって4年目を迎えた。腕が上がった実感はない。師匠は「満足いくのは50足に1足だけ」と言っていたが、そのペースにも及ばない。独り立ちした今でも分からないことは出てくる。そのたびに家を訪ねて、教えを請うている。それでも組み立てるのは早くなった。良質な木が見抜けるようになり、廃棄も減った。

昨年、かんじきの小売価格を上げた。円安も、物価高も関係ない。自分の儲けのためでもない。未来のためだった。「僕もいつかは引退する。でも、次にやりたい人が出てくるかもしれない。その時に生活できない金額じゃ困るでしょう。『荒井のせいで終わった』なんて言われたくない。ちょっとでも魅力的に見える足場をつくらなきゃ」。最初は老後の趣味として始めたつもりが、今では伝統文化を育てる意識が芽生えた。

工房の窓からは立山連峰を見渡せる。立山かんじきを履き、その雪を踏みしめる人もいるはず。作業する手に力が入る。

冬が近づき、かんじきの注文は毎日のように入るそうです。荒井さんが立山かんじきを履いて雪山へ行くと、登山客が話し掛けてくるそうです。「さっきすれ違った人が『立山かんじきがいい』と言っていましたよ」と教えてくれることもあるとか。「僕が作ったんだよ」と教えるのは、きっと誇らしいことでしょう。



「虹」第7巻 発売中

最新刊の第7巻「虹 補助輪をはずした日の風」は、北日本新聞連載の121～140回目までの20話分を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時～午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見・ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50

北日本新聞社西部本社「虹」係

FAX 0766-25-7773

mail niji@kitanippon.jp

次回掲載は12月1日(木)です。

紙面提供/人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作/北日本新聞社  
メディアビジネス局